ふたつの町の ひとりの女

藤本義一

ふたつの町の
ひとりの女

藤本義一

徳間書店

ふたつの町のひとりの女
定価は帯・カバーに表示してあります
著者—藤本義一
発行者—荒井　修
発行所—株式会社徳間書店　東京都港区新橋四—一〇　郵便番号一〇五—五五
電話東京(〇三)四三三—六二三一(代表)　振替東京四—四四三九二
印刷所—㈱清水印刷所
カバー印刷—近代美術㈱
製本所—ナショナル製本
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします
© Giichi Fujimoto 1988 Printed in Japan
〈編集担当　松岡妙子〉
ISBN4-19-123610-5

ふたつの町のひとりの女——目次

振子(ふりこ)の女 7
脚(あし)を抱く女 37
仮面(かめん)遊び 67
昔、男ありけり 95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

場外(じょうがい)の女 123
ふたつの町のひとりの女 153
姉妹晴雨記(しまいせいうき) 183

装幀・福田隆義

ふたつの町のひとりの女

振子(ふりこ)の女

一

おれが最初に、その電話を受けたのは七月下旬の寝苦しい夜だった。大阪の日中の気温が三十七度を越えたという深夜ニュースをテレビで観て、ランニングシャツにブリーフという姿で横になったものの、網戸の向うの隣接マンションのクーラーの音がやけに喧しく、寝つかれず、午前二時近くまで腹這いで週刊誌のクイズをやっていた時、電話が鳴った。

受話器をとった途端に、少し嗄れた男の声が飛び込んできた。

「ヒロコ、おれだよ、もう怒ってないんだろう……。なんとかいってくれよ。おれはさあ、ヒロコがいないと駄目なんだよ」

一方的に喋る奴だ。

おれは、そいつを殴り飛ばしてやりたかった。

「おい、お前、どこに電話かけとるんや」

怒鳴りつけると、相手は、えッと叫んで言葉を切り、

「×××局の×××××ではないですか」

という。×××局という局番は合っているし、四桁のうち××××は合っているが、最後の一桁が『七』ではなくて『一』だった。

「××××七やのうて、×××一やで、こっちは……」

というと、相手はスミマセンと小さな声になった。おれは叩きつけるように受話器を置いて、週刊誌のクイズを続けようと思ったが、もう不可能だった。

おれは煙草を喫いながら、間違い電話の男と女の関係を組み立てていた。

男と女がいる。男の年齢は声の調子から三十歳を少し越えた頃で、女は水商売ではないか。女は男を棄てて転々と住居を変え、男はその住居を嗅ぎつけて電話を入れたに違いない。女を水商売と断定したのは、電話がかかってきた時刻からの推定である。ホステスの一人暮しといったところだろう。すると男は、かつて情夫の立場にあったように思える。男と女の関係は一年以上続いていたのではないか。こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の想像は、男のあまりにもなれなれしい言葉付きからの推理だった。

最初の間違い電話の推理は、この段階で終った。いや、終えたといった方がいい。それ以上あれこれと見知らぬ男女について推測することが馬鹿らしくなったからだ。

が、三日後の深夜に、おれはまた同じ男から間違い電話を受けた。午前二時かっきりにかかってきた。

「ヒロコ、おれの気持がわかってほしいんだよ。おれと親父とは、そりゃ、親子の関係はあるけれど、人間はまったく別なんだから。人格は違うんだから……」

のっけから親子関係が出てきたので、おれは相手同士の関係を知りたい好奇心に傾いた。

「ヒロコ、ヒロコがいないと、やっていけないんだ。ヒロコから離れたなら、なにもやっていけないんだ……」

男は泣き声だ。おれは、またまた腹立たしくなった。女に縋(すが)りついている男に哀れみは覚えない。逆なら話は別だ。もし、間違い電話の相手が女だったら、おれもまた態度を変えていただろう。

「あんたな、また、間違うたんか。あんたの相手のヒロコという女は×××局の×××七の電話番号やろがな。こっちはな、×××一番やで。此間(こないだ)も間違うてかけてきたやろ。こっちはな、明日も勤めがある身なんやで。時間のこと考えてもらわな困るな」

すると、男は、最初の時と同じように短い声を発して、スミマセンと低声(こごえ)で言い、電話を切った。

一度目と二度目の違うところは、おれが受話器を叩きつけたのと、向うが先に電話を切ったところだ。この違いは、明らかに、おれ自身の好奇心の差があらわれたことである。一度目の腹立ちは私生活を妨害されたという腹立ちだが、二度目の腹立ちは俗にいう男の甲斐性なしに対する憤りであった。

おれは二度目の間違い電話の受話器を置いた後で、間違い電話の相手が喋った言葉を反芻(はんすう)し、推理する楽しみを覚えた。

第一に、ヒロコという名の女性が、おれのおんぼろアパートの近くにいるということだ。局番が同じだから当然のことに地区が限られてくる。とくに人

阪市内の場合は区域が狭い。ヒロコという名を漢字にすれば、宏子、広子、弘子、寛子、比呂子、などという字が並ぶ。

男が間違い電話になるのは、七を一と間違うわけだから、彼はダイヤルを回していないことになる。ということは、男は一旦、第三者に電話番号を口頭で伝えて、電話を繋いでもらう立場にいる。会社の寮か、それとも会社の宿直室にいるか、おれの住んでいるおんぼろアパートよりも下級の管理人経由でしか外部に電話をかけられない立場にいる男だということになる。

男と女の関係は、単なる男女の仲とは違って、やや歪つな様子である。親父という言葉とか親子という言葉にそれが感じられる。

おれは学生時代から推理小説のファンだったので、この二回の間違い電話から、あれこれと推理を楽しんだ。親父トハ親子ノ関係ダガ人間ハ別ダという言葉の意味から、おれはヒロコなる女性が若い後妻ではないだろうかと考えた。若い後妻が息子と関係をもつということも考えられる。以前に、ポルノ映画でそれに似たストーリーを観た記憶がある。が、それではおかしいと気付いた。ヒロコなる女は一人住いであり、男はようやく捜し当てて復縁を迫っている気配であるから、若い後妻という説は撤回した方がよさそうだ。

おれは、実際自分自身が馬鹿だと思う。二回目の間違い電話がかかってきた日は夜明けまでつまらない推測をつづけていて、翌日は勤め先に遅刻してしまった。

おれは朦朧とした寝不足頭で一番大事なことを取り外していたことに気付いた。

×××局の×××七の電話番号の主を訪ねてみたなら、なにもかもが一挙に解決するというわけだ。おれの百貨店外商部という立場は、仕事にかこつけて不意の訪問が許されるという恵まれた立場である。なんだかんだと推測しているよりも敵の陣営に乗り込んで行った方がどんなに手っ取り早いかわからない。

おれは、×××局の×××七番をダイヤルした。午後一時過ぎだった。呼出し音が三区切りあって、

相手は受話器を手にした。
「もしもし、私は……」
おれは勤務先の百貨店の名を告げ、外商部の取引を依頼したいといった。
世間では、一か八かの勝負などというが、これは一か七の勝負だなと馬鹿なことを考えていた。これは気持に余裕があってのことではない。むしろ、異常な緊張を覚えていて、なんとか気持をほぐそうとしたのだ。
「誰方かの紹介があったのでしょうか」
女の声は落着いていた。声の調子から三十代も半ばの女に思えた。低めだが艶がある。
「別に紹介者はありませんが。正直に申しあげますが、現在、百貨店の商戦は激烈ですので……」
「じゃ、あなたはあちこちに同じような電話をかけてらっしゃるのかしら……」
「いえ、そういうわけではありません。お客様を厳密に選ばせていただきまして……」
おれは顧客勧誘時の常套句を並べた。
「あ、そうなの。そちらに、なにか、あたしに関しての資料のようなものがあるわけね」
といってから、女は独言するように、気味が悪い……といった。
「いえ、決して、内密に調査した資料があるというわけではありませんが……」
「でも、あたしを選んだというなら、なんらかの資料を基にしてのことなんでしょう……」
女は執拗に絡んでくる気配を見せた。こういった場合は勧誘に脈があるとおれは過去二年間の外商部の経験から読んだ。
「ま、そりゃ、人間、生きて生活してりゃ透明人間ってわけにはいかないわねえ。なにをして食って、収入はどれだけあるかぐらいはわかるわね。税務署の所得税申告を参考にしてもわかるわねえ……」
女は、急に、おれに同情的になってきた。
おれはどぎまぎした。こういうふうに客の方から近付いてくるのは全く珍しいケースだ。いつもは、こちら側の粘り勝ちが多い。おれは足許を掬われた感じだった。
「今日の午後三時にいらっしゃい。書類かなにかあ

るでしょう……」
好奇心で回したダイヤルがおれの職場での成績に直結するとは思ってもいなかったから、おれは狼狽した。
「ありがとうございます。……で、お伺い致しますが、地下鉄の桃山台で降りればいいのでしょうか」
おれは局番から、おおよその地域を知っているに過ぎない。この桃山台という駅名にしたところが、局番の中央部に当るからだ。
「ええ、桃山台を降りて、そうね、北に向って二百メートル、新御堂の道路に面して千里ニューコーポが見えるでしょ。その六階の十八号室。この住所、あなた、知らなかったの」
「いえ、し、知ってましたが、念のためにと思って……」
おれの腋窩からじっとり冷たい汗が滲んできた。受話器を置いてから、おれは学生時代のワンダーフォーゲルの疲労に似たものを覚えて、太い息を幾度も吐いた。そして、捜査員が犯人のアジトを突きとめたような満足感に酔っていた。

千里ニューコーポの玄関ロビーを入ろうとして、おれは呼び止められた。誰を訪問するかをチェックしているのだという。冷房のよくきいた床はスペイン製の手焼タイルが敷き詰められていた。このタイルは一度外商で扱った品物だ。神戸の新築豪邸に納入したものと同じだ。その値段に愕いた記憶がある。
「六階の十八号室です。ぼくは……」
胡乱気に見る初老の管理人に、おれは名刺を差し出した。おれの身分がわかると、すぐに十八号室に連絡をとった。
「どうぞ……。ハラダさんに連絡しました」
「どうも……」
エレベーターの中で、おれはハラダヒロコを想像した。声は低いが太っていないように思える。それにしても、電話番号の下一桁が違うだけで、おれの寝起きしているおんぼろアパートとは雲泥の差だ。
六階の十八号室は一番奥まった部屋で、戸はチーク材を用いたがっしりしたものだった。賃貸としても、部屋代はおれの一カ月分の給料を遥かに上まわるだろうと溜息が出た。

おれは海面近くを群をなしてぴらぴら泳いでいる雑魚の類だ。その一匹の雑魚が深海の珊瑚礁の青い透明の世界に迷い込んだのだ。

「きっちり、三時に来たわね」

女は、ムームーのような薄い部屋着で、おれを迎えた。

おれの想像を越えた美人だった。痩身だが胸のあたりは豊かで、細面の顔の造作は目をのぞいて、ちまちまと小さく整っている。化粧のない目は黒目がちで大きく、おれを直視するように見る。小さい唇には、綻ぶ寸前の微笑が漂っていた。

「あなた、予知能力があるんじゃない……」

女はスツールに大胆な脚を開いた姿勢で座り、両肘を膝に立て、椀にした掌に顎をのせて、おれを上眼遣いに見た。悪戯っぽい少女のポーズに似ている。

「予知能力……」

「そうよ」

「いや、あきません。競馬でも麻雀でも、いつも負けですから……」

「あ、そう。でも、あたし、家具を買い替えようと思っていた矢先だったのよ。このあたしの気持をどうしてあなたが知ったのかと思って、とても愕いたわ」

女の言葉遣いには、関西訛が一切ない。

おれは、彼女の年齢を推測していた。肌艶からは三十代前半のようにも思える。

「あなた、今、あたしがいくつかと考えているんでしょうが……」

瞬きしない悪戯っぽい目がおれを凝視している。図星のおれは慌てた。予知能力のあるのはあなたの方だといい返したおれの声は嗄れていた。

「はは、やっぱりね。で、幾歳に見える……」

「はあ、三十二か三……」

「はは、お世辞が上手ね、倉本隆志君……」

女は、おれの名刺を抓み上げ、小さな団扇にして頬のあたりに風を送りながらいった。

「あたしの年齢まで調べていなかったようね。正直にいって、四十五よ」

「冗談でしょう……」

「本当よ。嘘ついたって仕方ないじゃない。三十代

はね、嘘を並べていたけど、四十になった時からは正直にいうことにしたの。人間、四十歳になれば、居直りってことね」
「はあ……」
「なんて顔をしてるのよ。で、家具のカタログを持って来てるの……」
「いえ、今日は宝石と貴金属のを……」
「あ、そういうのは今日は不要ね。すぐに北欧製の家具のカタログを持って来てほしいのよ」
「わかりました。今日のところは、この顧客カードに自筆で記入していただきたいのですが。カードをコンピューターにイン・プットして保管しますので……」
「わかったわ」
ペンを握って踊み込んだ女の髪から甘い香料が漂い出て、おれの鼻腔を擽った。
女は達筆で『原田博子』と書いた。おれの想像した漢字名の中にはなかったヒロコだった。

二

一週間の間に家具だけで三百万近くの商談が成立した。入店二年目でこれだけの成績を上げたのは、はじめてだった。
「飛び込みでこれだけ売り上げたというのは立派だな。それもキャクイチだからな」
外商部長の瀬川が驚嘆した。キャクイチとはお客一人の売買という意味である。おれも鼻高々だった。間違い電話が思わぬ好運を連れてきたのだ。所詮、人生って奴はいつどう好転するかわからないものだと思う。
おれは原田博子の経営する北新地のクラブ『ボレロ』に出入りするようになった。
「店の名前が如何にも古くさいでしょう。あなた、ボレロって映画を知ってる……」
カウンターで水割りを飲んでいるおれに彼女は話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.